

K-207

天童市埋蔵文化財調査報告書第9集

乱川一字一石経壇塔遺跡

発掘調査報告書

1994

天童市教育委員会

序

本報告書は、天童市教育委員会が実施した「乱川一字一石經壇塔遺跡」の発掘調査の結果をまとめたものであります。

当遺跡は、天童市乱川の旧国道13号線沿いにあります。もとの蟹沢街道と若松街道、羽州街道の辻に造られた本經壇塔が、天童市北部土地区画整理事業に伴って、移動されたことになったため、所有者の依頼で、その記録保存を図る目的で、緊急発掘調査を実施したものであります。

調査の結果、舗水與次右衛門という人が、元文3年（1738年）に、両親の追善供養のために、19万余の一宇一石經を埋納した經壇であることが確認されました。このほかにも、天童市内に3基、山形市で1基の經壇塔と修造塔を建立していることも、判明しました。これらのことから、当時の信仰の形態や営みを知る貴重な資料を得ることができました。

本報告書が、本市の歴史の解明、さらには埋蔵文化財に対する理解と認識につながれば幸いと存するところであります。

最後になりましたが、調査に携っていただきました村山正市さん、調査にご協力いただきました本遺跡の所有者的小座間富夫さん、天童市北部土地区画整理組合の滝口茂局長はじめ職員と地元の皆様、そして、ご指導をいただきました川崎利夫さんと関係各位、さらに、山形県教育委員会に感謝の意を表し、序文といたします。

平成6年9月10日

天童市教育委員会

教育長 横田光正

例　　言

- 1 本書は、天童市北部土地区画整理事業の換地に伴い、一字一石経壇塔が移転することによる緊急発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、平成6年6月15日から6月20日まで実施した。
- 3 発掘調査の場所は、天童市大字乱川2629番地である。
- 4 調査体制は、次のとおりである。

調査指導 川崎 利夫（山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館長）
調査担当者 村山 正市（社会福祉法人 明幸園ディサービスセンター職員）
調査員 長瀬 一男（天童市社会教育課副主幹）
　　　　長谷川 武（天童市社会教育課主査）
事務局 天童市教育委員会社会教育課
　　　　三澤 将良（社会教育課長）、高橋萬策（社会教育課長補佐）
　　　　長瀬 一男（社会教育課副主幹）、長谷川 武（社会教育課主査）
調査協力 地権者 小座間 富夫
　　　　天童北部土地区画整理事業組合
　　　　高島巖太郎（理事長）、滝口 茂（事務局長）、佐藤 孝芳（技師）、
　　　　村山 みち子（職員）、村山 孝子（職員）

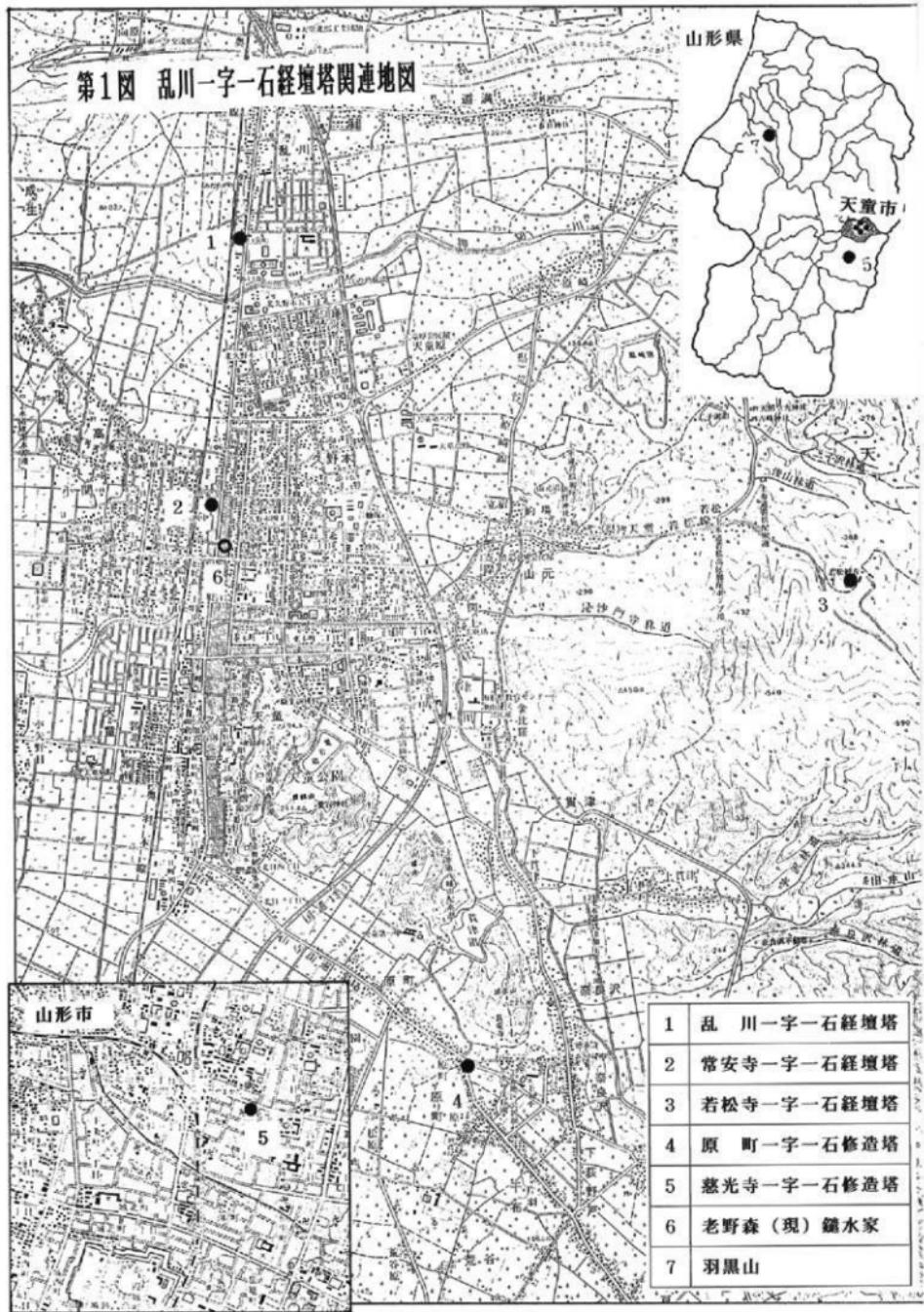
- 5 出土遺物については、地権者の意向により、移動箇所に埋納した。
- 6 報告書の作成にあたって、常安寺住職松岡達雄師、若松寺住職里見等順師、慈光寺住職高橋師、陽雲寺住職光之師、鏡水景一氏より助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。
- 7 本報告書の作成は、調査担当者村山正市が中心になり、調査員長瀬一男、長谷川武が補佐した。編集は、天童市教育委員会社会教育課でおこなった。

目 次

1	調査に至るまでの経緯	5
2	調査の位置及び地形	5
3	調査の方法と経過	7
	(1) 調査の方法	7
	(2) 調査の経過	8
4	乱川一字一石經壇塔の調査の概要	9
	(1) 外形と伝承	9
	(2) 埋納施設	12
	(3) 経石	12
5	関連一字一石塔	16
	(1) 常安寺の一字一石經壇塔	16
	(2) 若松寺の一字一石經壇塔	20
	(3) 原町一本杉の一字一石修造塔	22
	(4) 山形市宮町慈光寺の一字一石修造塔	22
6	考察とまとめ	25
	(1) 一字一石經について	25
	(2) 鐘水與次右衛門について	27
	(3) 鐘水與次右衛門と5つの一字一石塔	31

第1図	乱川一字一石經壇塔関連地図	4	図版1	調査区遠景・調査区
第2図	乱川一字一石經壇塔とその周辺	6	図版2	乱川一字一石經壇塔・移動作業
第3図	乱川一字一石經壇塔位置図	7	図版3	乱川一字一石經壇塔発掘状況
第4図	乱川一字一石經壇塔実測図	10	図版4	出土経石と移動埋納状況
第5図	埋納施設の平面図と断面層位	11	図版5	出土した一字一石經石
第6図	基本層序	11	図版6	常安寺一字一石經壇塔
第7図	経石	13・14	図版7	若松寺一字一石經壇塔
第8図	関連一字一石經塔	17	図版8	原町一本杉一字一石修造塔
第9図	常安寺一字一石經壇塔	18	図版9	山形市慈光寺一字一石修造塔
第10図	常安寺読誦百部塔	18	図版10	若松寺棟札
第11図	若松寺一字一石經壇塔	21	図版11	移動後の乱川一字一石經壇塔 (図版は32~38)
第12図	原町一本杉一字一石修造塔	21	表	天童市内的一字一石塔年表
第13図	山形市慈光寺一字一石修造塔	23	表	鐘水家関係年表

第1図 亂川一字一石經壇塔関連地図



1 調査に至るまでの経緯

天童市の北部地区、乱川集落・押切川北部一帯について昭和63年10月から土地区画整理事業を実施している。内容は、従来の畠地や果樹園、荒蕪地に道路を縦横にきり、側溝等の整備を行い、全体を平坦地にして宅地化を目指すものであり、事業は、天童市北部土地区画整理組合が事業主体となって行われている。

これまでの経過では、事業に先立ち、山形県教育委員会文化課によって遺跡の分布調査が行われ、事業区内に「杉塙」遺跡があることが確認され、天童市教育委員会に緊急発掘調査を実施するよう要請された。市教育委員会では、これを受けて、平成4年4月に緊急発掘調査を実施している。

工事の進捗に伴って、平成6年6月15日天童北部土地区画整理組合より、天童市教育委員会に、小座間富夫氏の所有地にある、乱川一字一石經壇塔の移動の立会いを要請され、教育委員会で工事に立ち会った。その結果、土中より遺物が発見され、文化財保護の立場から教育委員会が主体となって、緊急的に発掘調査を実施することになった。

調査については、依頼時期及び工事の期日上の制約等があり、指導機関との連絡をとる時間的余裕もなく、また十分な調査体制を組織し、調査するに至らなかったが、可能な限り記録保存に勤めることにした。

平成6年6月15日に天童市文化財保護審議会を開催し、遺構及び遺物の内容等を報告し、今後の進め方等について協議した。会議終了後、文化財保護審議委員3名により、現地調査を行い、今後の調査方法について指導を受けた。また、この内容について、平成6年6月16日に県の文化財課と連絡をとり、対応について指導を受けた。

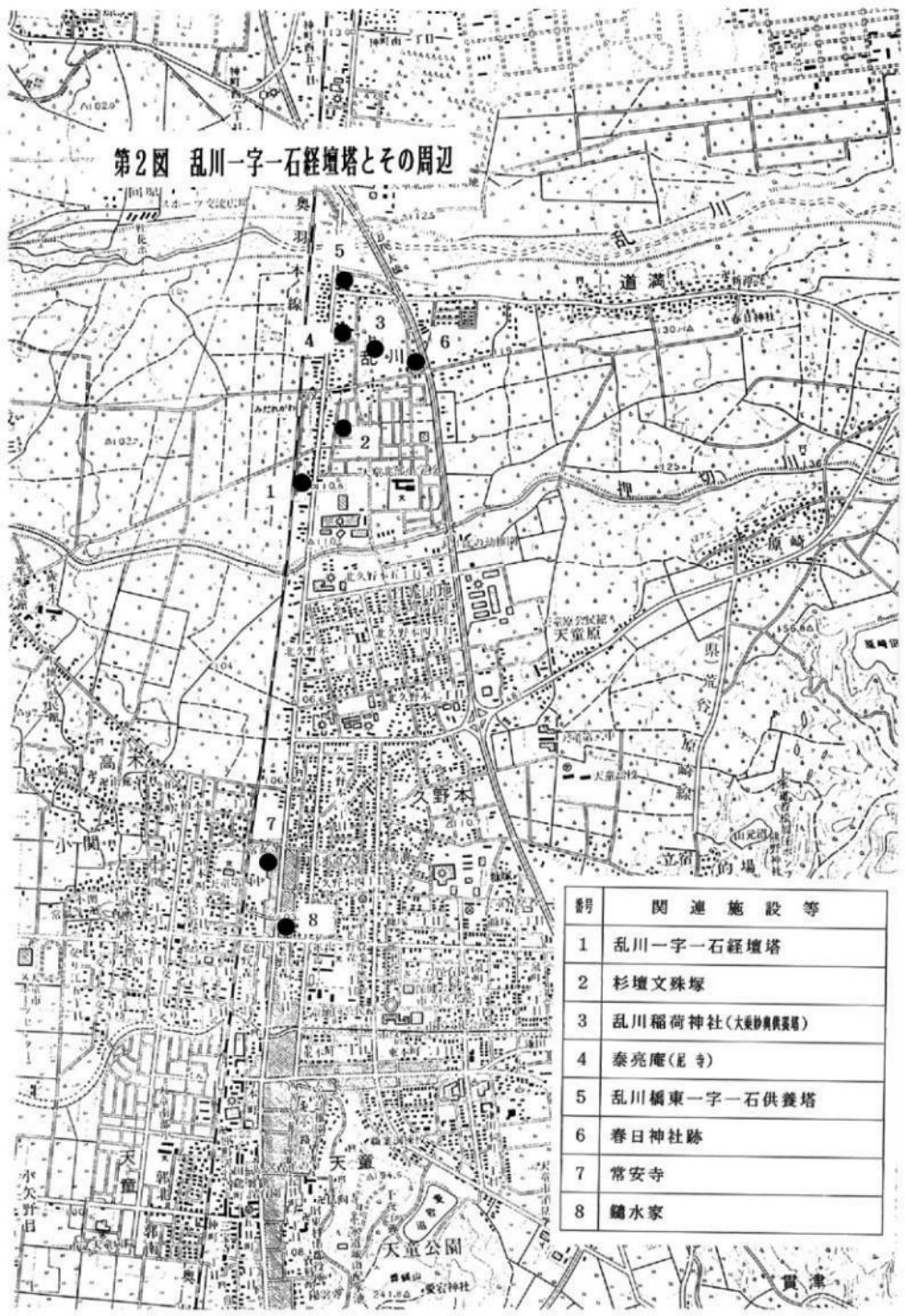
以上のような経過で、平成6年6月15日から7月31日まで調査を実施した。

2 調査の位置及び地形

調査地の乱川一字一石經壇塔の所在地は、天童市大字乱川2629番地である。奥羽山系に源を発し、乱川に合流する押切川と、天童市と東根市の境界を流れる乱川は、天童市北部を並行に西流している。この2つの河川に挟まれたところに乱川集落がある。両河川の距離は、約1.4kmで、これを南北に跨いで旧羽州街道がとおり、それに沿って細長く発達したのが、乱川集落である。

乱川一字一石經壇塔は、乱川集落南端にあり、羽州街道と、東根につながる蟹沢街道、若松寺に至る若松街道の交差点に位置している。乱川一字一石經壇塔の位置は、羽州街道の西側で蟹沢街道北側交差点にある。すなわち、羽州街道をはさんで東側が若松街道、北西に伸びるのが、蟹沢街道である。蟹沢街道は、乱川をわたり、成生新開（向原）、東根

第2図 亂川一字一石經壇塔とその周辺



翻 関 連 施 設 等

- | | |
|---|-----------------|
| 1 | 亂川一字一石經壇塔 |
| 2 | 杉壇文殊塚 |
| 3 | 亂川稻荷神社(大乘妙真供養塔) |
| 4 | 泰亮庵(尼寺) |
| 5 | 亂川橋東一字一石供養塔 |
| 6 | 春日神社跡 |
| 7 | 常安寺 |
| 8 | 鰐水家 |

市神町の西集落を抜け、蟹沢に通じる古道で、幅1間余の作場道である。この街道に面して経壇塔は造立されている。

この経壇塔のやや北方に、乱川公民館があり、この場所には、戦前まで、観世音菩薩を本尊とする、泰亮庵と称する尼寺があった。この尼寺の最後の住職（24世という）尼僧が、戦前まで、本經壇塔に読經に来ていたと、地権者の小座間マス氏は話している。平成4年度には、天童市教育委員会が主体となって、文殊塚と称される杉塚の発掘調査が実施され、近世の塚であることが判明した。

天童市道満に鎮座する春日神社は、古い時期には乱川の宇大明神にあり、それが後になって、現在地に移したといわれている。大明神付近からは、平安時代の古代刀3振が発見されている。

乱川の橋に近い旧羽州街道沿い東側には、碑文に「一天四海 有縁無縁法界平等利益皆帰妙法 草木国土悉皆成佛 嘉永六年（1853年）」が印刻されている経碑がある。移動工事の際、土中より多量の一宇一石経が発見されている。関連石塔として天童市久野本常安寺一字一石塔、天童市原町一本杉店前の一宇一石塔、天童市若松寺の一宇一石塔、山形市宮町慈光寺一字一石塔がある。このうち、原町の一宇一石塔のした土中より多量の経石が出土している。

3 調査の方法と経過

（1）調査の方法

第3図 亂川一字一石經壇塔位置図



調査は、乱川一字一石納経壇塔と経壇、さらには市内を中心にして、現存する、関連一字一石塔について実施した。経壇にかかる調査範囲面積は、 1.6 m^2 で東西4m、南北4mである。調査の目的は、つぎのようにした。経壇塔の下の土中に遺構・遺物があるかどうか

か。遺構・遺物の出土状況はどうであるか。関連一字一石塔との関わりはどうであるか。

調査の方法については、全体的にグリットを配置し、東西、南北にそれぞれトレントを設定した。経壇を縦横に半裁し遺構・遺物の検出と確認作業をおこなった。

調査過程では、工事途中での限られた調査期日で初期の目的を達成しなければならないことから、経壇の発掘調査については、重機を使用し、精査部分については手掘りで調査をおこなった。

(2) 調査の経過

調査期間は、平成6年6月15日から平成6年7月31日までである。現地の発掘調査は、6月15日から6月20日までであり、6月21日、6月22日は関連一字一石塔の調査及び遺物の整理実測作業等をおこなった。

- 6月15日 現地にて現況調査、試掘、写真撮影をおこない、その後、重機によってトレントを堀り下げ、遺構・遺物を検出したところで手堀りによる調査をおこなった。蓋石、粘土室及び経石を検出した。調査の内容を記録した。多量の経石が出土し、一部を取り上げた。
- 6月16日 写真撮影及び手堀りによる遺構検出作業をおこなった。遺物の検出をおこなった。また、伝承等について聞き取り調査をおこなった。
- 6月17日 写真撮影及び手堀りによる遺構検出作業をおこなった。遺物の検出をおこなった。蓋石、粘土室の詳細調査及び経石を検出した。
- 6月18日 調査員と他調査員2名と調査現場で内容の検討をおこなった。
- 6月19日 市文化財保護審議委員1名と現場で内容の検討をおこなった。
- 6月20日 遺構・遺物の最終検出作業を行い、終了した時点で写真撮影と測量を実施した。
- 6月21日 原町、久野本常安寺、若松寺で関連調査をおこなった。遺物の整理と実測作業をおこなった。
- 6月22日 遺物・図面の整理と実測作業をおこなった。～7月31日 関連一字一石塔の調査を実施した。

なお、聞き取り調査については、小座間マスさん（79歳）を中心にしておこなった。重機での作業については、造園業者の山口造園の協力でおこなった。

4 亂川一字一石經壇塔の調査の概要

(1) 外形と伝承

乱川一字一石經壇塔は、石で土留めをしている一辺180cmの正方形の壇状の中心上に置かれている。石塔は安山岩で造られた全高221cmの笠石塔である。縦103cm、横120cm、高さ31cmの凝灰岩の基礎を置いてあり、基礎は15cmほど土中に埋まっている。塔身は高さ142cmで、面とりしたものである。四柱屋根の高さ17cm幅52cm。相輪の部分が31cmの構成となっている。宝珠高17cm、幅18cmで、宝珠の下に諸花がある。經壇の側には、樹齢約55年の柿の木が立っている。

小座間家には、代々、この塔の下には、かます7つ分のお經石が埋められている、という言い伝えが伝わってきており、乱川地区にあった泰亮庵（現乱川公民館地）という尼寺から、戦前まで、24世の尼僧（曹屋智淨尼）がお参りに来ていた、ということである。

塔身部3面の陰刻碑文は、つぎのとおりである。

月光院要岳了玄上座

アク（種字）謹拜書大乘妙典一字一石二部經壇塔（蓮華座）〈東面〉
覺潭妙圓比丘尼

サ（種字）南無大悲觀世音菩薩守護（蓮華座）〈西面〉

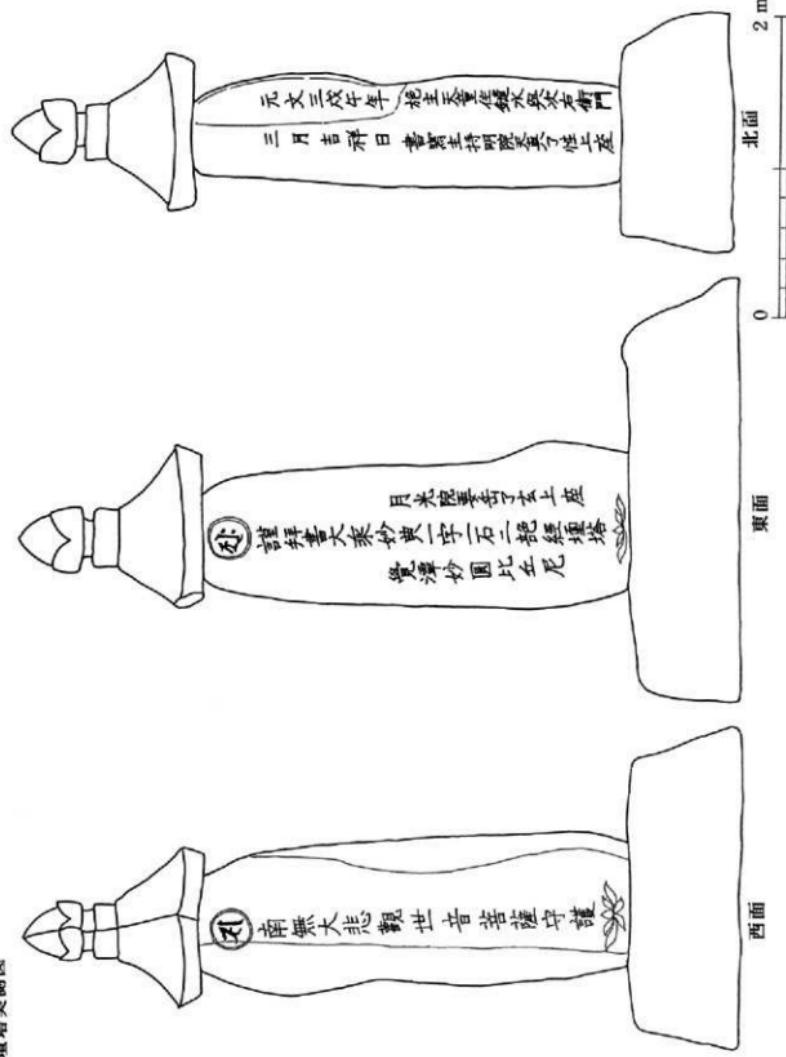
元文三戌午年 施主天童住 鎌水與次右衛門
三月吉祥日 書寫主持明院天眞了性上座 〈北面〉

注1：元文三戌午年は、享保年間の次の年号で西暦1738年。

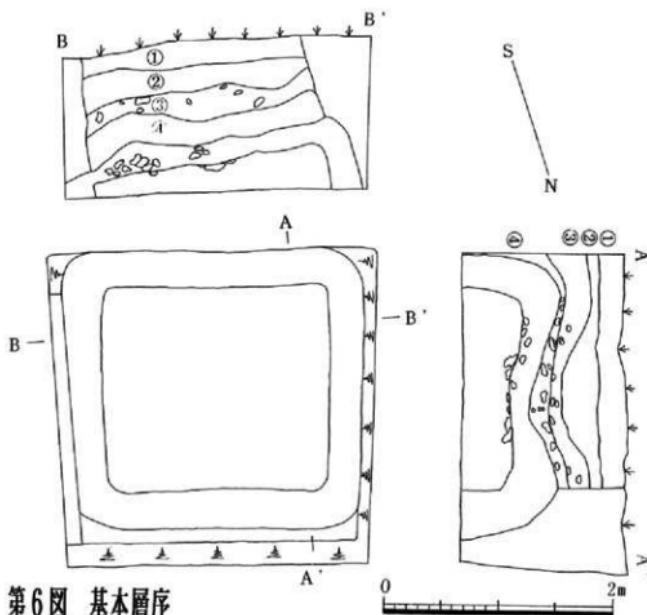
8代将軍徳川吉宗の時代。この年、全国の戸籍調査が実施されている。

注2：この一字一石塔のほかに、鎌水與次右衛門が建立した一字一石塔が天童市内で3基山形市で1基確認できた。
(詳細は後述)

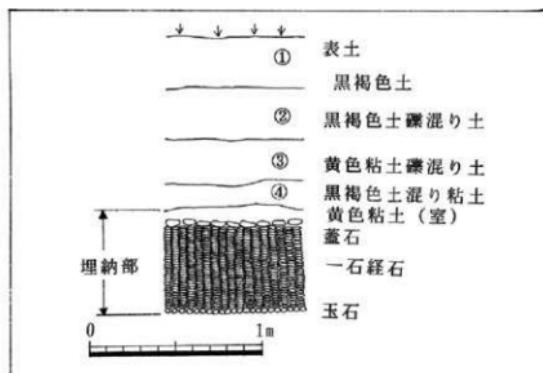
第4図 川一石經塔実測図



第5図 埋納施設の平面図と断面層位



第6図 基本層序



(2) 埋納施設

埋納施設は、經壇塔の基礎のほぼ中央部直下に位置している。基礎の下には、粘土質の土に、人頭大の河原石を混ぜ、中央部には蓋石として、人頭大よりやや大き目の偏平な石をのせている。埋納施設は、地山を堀込んで方形に造られており、地表からの深さは 160 cm である。底部平面の寸法は、内面で 180 cm × 180 cm である。外面で 240 cm × 240 cm である。

埋納部は、方形堅穴土壤である。黄色の粘土によって、4 側面及び上部は厚さ約 30 cm の壁が造られている。土壤の平面は底部で、180 cm × 180 cm で、高さが 60 cm である。上部では縦横がすばまっており、埋納部全体としては、台形の室になっている。上部で中央部に向かい、弱い傾斜の窪みが観察される。底部は玉石を敷いて突き固められており、固い地盤になっている。

埋納部から地表まで 4 層の封土の変化があり（第 5 図）、各層とも土を固め、河原石や砂利を少し入れ、内部を保護する対策をとっている。初め押切川や乱川の氾濫などにより周辺の土石が混入したのかとも考えられたが、付近の土層の状態から、河原石は人為的に敷いたものであり、埋納部の施工法であることが考えられる。

第 1 層は、黒褐色土である。第 2 層は、黒褐色土礫混り土である。第 3 層は、黄色粘土礫混り土が主体で、それに一部砂混り、さらに黒褐色土が混入している。第 4 層は、黒褐色土混り粘土層である。A、A' の断面より、最初に黄色粘土の室を造り、それを上から押し固め、その上に第 4 層土を平らに盛った。さらに、第 3 層を盛って、また押し固め、第 2 層土を平らに盛ったと、考えられる（第 6 図）。

(3) 経石

経石の埋納の方法は、經典の經文の配列順にもとづいて並べられたものではなく、一括してあけいれられ、上から押したものか、不整列に埋納された状態で検出された。

経石は、一定の大きさで、直径約 3 ~ 4 cm の楕円形及び卵形の偏平な石である。これらは、流水などにより磨耗したいわゆる河原石で、岩質は、安山岩、玄武岩、流紋岩、砂質岩、花崗岩などである。全体的に見て、形状や大きさなどは、意図的に揃えて集められたものである。

経石の出土量は、果物用コンテナ箱で 43 箱である。埋納された経石は、地権者の強い意思によって、全部を資料として得られなかったが、この出土量を計算すると、1 箱が平均して約 60 kg あったことと、経石の平均的な重さが約 13 g であることから、19 万余の量であると推定される。

經文は、毛筆により、墨で直接一つの石に一字が書写してあるが、明瞭に文字が読める

5 cm

第7圖 經石





ものはほんのわずかで、ほとんどのものが、墨蹟すら確認できなかった。全体を詳細にわたって調べることができなかつたが、経石のほぼ4分の1以上が安山岩であり、ほとんどの墨書が消滅していた。表面が滑らかであり、墨で書きやすいが、反面、墨書が消滅しやすかった、と考えられる。また、柿の木の細くて長い黒い根が、経石のところまで伸びており、これらが保存の障害になったと考えられる。

採集した経石の書写した字体や字の大きさは、ほぼ一定しており、楷書で書写している。經典の出典については、調査で得た断片的な資料で特定することは、困難である。しかし、一つの手がかりとして、碑文に「大乘妙典一字一石」とあることから、妙法蓮華經（9万6千384文字）を書写したことが考えられる。ただし、妙法蓮華經の全部を書写したのか、一部であったかの特定は、出土状況からして、不可能である。

5 関連一字一石經塔

乱川一字一石經壇塔の碑文によれば、造立施主は、天童住の鎌水與次右衛門である。今次の調査によって、鎌水與次右衛門が建立した一字一石塔は、乱川一字一石經壇塔の他に天童市久野本常安寺、天童市山元若松寺、天童市原町一本杉、山形市宮町慈光寺で計4基確認できた。このうち、原町一本杉と山形市宮町慈光寺のものは、修造塔であり、この他の経壇塔である。

(1) 常安寺の一字一石經壇塔

位 置 天童市久野本一丁目7番2号

建 立 経碑は享保16年(1731年) 読誦碑は享保18年(1733年)

常安寺は、浄土宗の寺院で天正10年(1582年)に洞蓮社良実上人によって開山されたもので、以前には現在の老野森糠塚付近にあったと、伝えられている。現在の寺地は久野本村同寺壇頭の青柳家から寄進されたものである。

常安寺には、鎌水家の墓地がある。場所は、山門の南側で、墓碑の他に経壇塔や読誦塔が建立されている。

系 玄 石碑 全体高172cm、塔身高104cm同幅37cm、笠は四柱屋根で高さ40cm軒最大幅57cm、屋根頂部の幅21cm、軒両端の高さ10cm、中央部の高さ5cm、宝珠は蓮の蕾で高さ28cm、幅19cmであり、基礎を有する。全体が粗面岩であり、碑は山門の近くに、正面を西向きに建ててある。

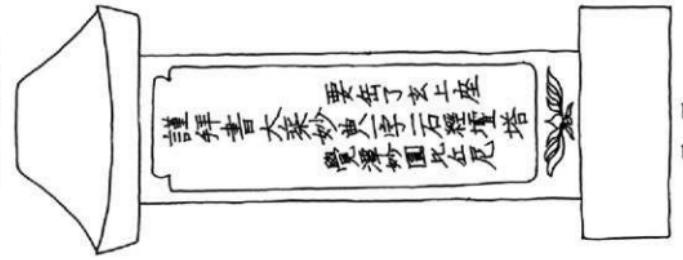
要岳了玄上座

謹書寫大乘妙典一字一石經石塔 (蓮華座) 〈西面〉
覺潭妙圓比丘尼

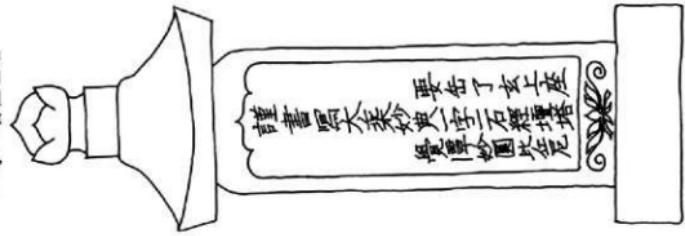
維時享保十六龍集靈光大口口口
有緣無縁三界萬靈法界群生同圓種智七世父母 〈東面〉
小靈十九日伏作造修施主鎌水了性

書應部信 善蓮社良口 上人云榮大和尚 〈南面〉
阿報禁定書經石 轉譽妙變信女 (淨) 岩榮心居士

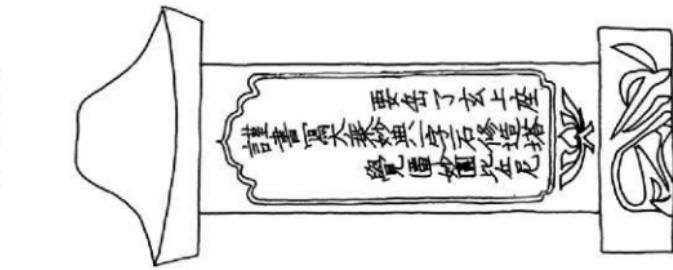
山元若松寺
一字一石經塔



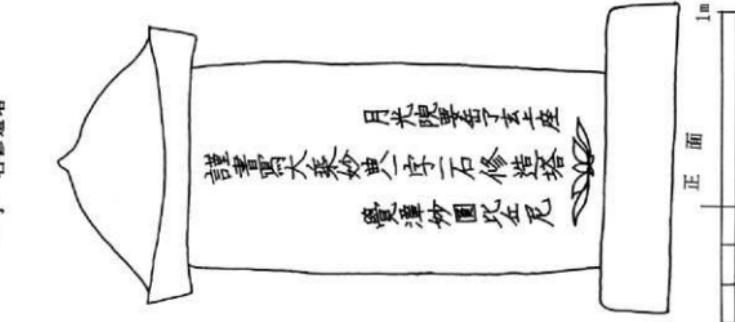
久野本常安寺
一字一石經塔



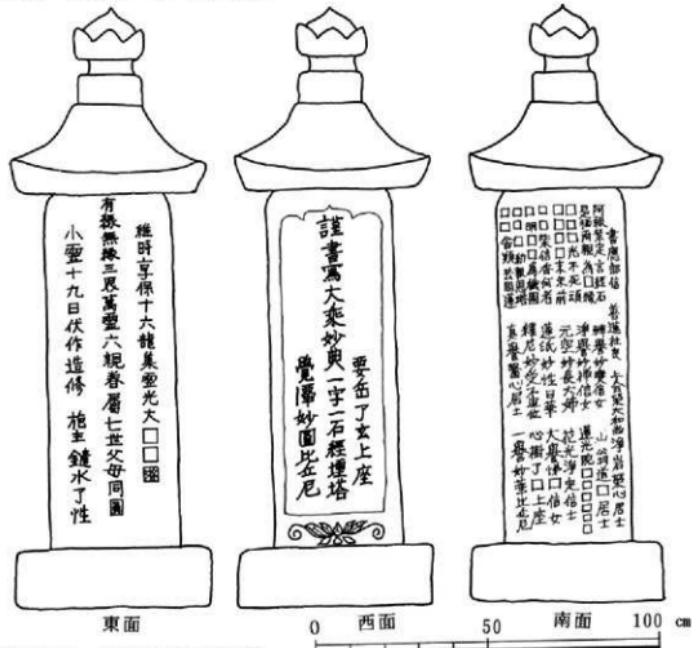
山形市慈光寺
一字一石修造塔



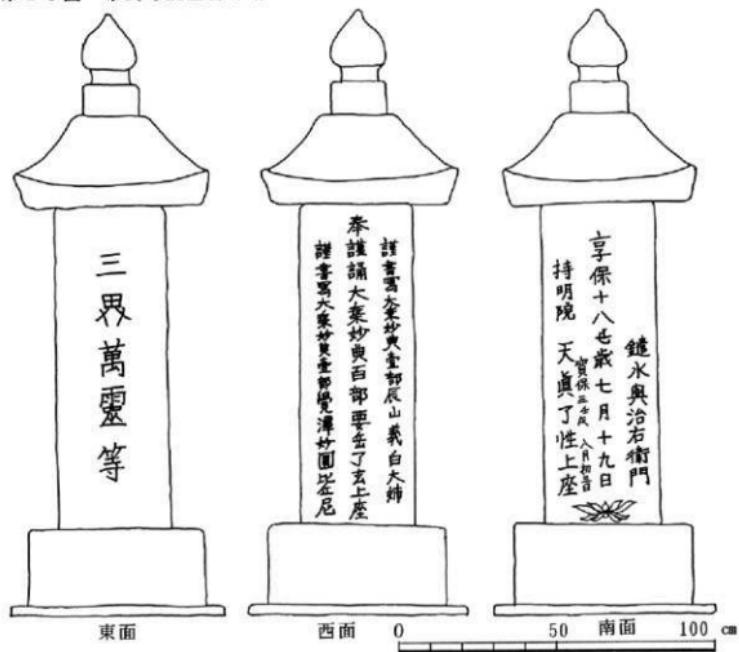
原町一本杉
一字一石修造塔



第9圖 常安寺一字一石經壇塔



第10圖 常安寺詠誦百部塔



是宿兩親為	縁	淨譽妙禪信女	山翁道口居士
□□□光不死願	元空妙長大師	蓮光院□□□□□□	
□□□□末朱前	蓮瓶妙性日華	花光淨定信士	
□□柴信香何者	釋尼妙受不退位	大譽梯口信女	
□明□□為穢國	真譽覺心居士	心樹了口上座	
□□□幼報恩塔		一譽妙華比丘尼	
□□舍類共同蓮			

(末無宗本信士ほか23名の法号)

〈北面〉

注1：享保十六年は、1731年。

法号は、碑文の刻み方より細く後世に追加したものもみられる。経碑の向かって右側に百部誦詠碑が建立されており、内容は次のとおりである。

誦詠碑 全体高182cm、塔身高101cm同幅36.2cm、笠は四柱屋根で高さ39cm軒最大幅59cm、屋根頂部の幅22cm、軒両端の高さ11.5cm、中央部の高さ8cm、宝珠は蓮の蕾で高さ32cm、露盤の高さ10cm、幅18cm宝珠の高さ16cm、最大幅17cm、基礎の高さ25cm、幅57cmであり、基礎は2段になっている。碑は正面を西向きに建ててある。

三界萬靈等

〈東面〉

謹書寫大乘妙典壹部辰山義白大師		
奉謹誦大乘妙典百部	要岳了玄上座	(蓮華座) 〈西面〉
謹書寫大乘妙典壹部覺潭妙圓比丘尼		

鍵水與次右衛門

享保十八癸丑歲七月十九日		(南面)
龍三壬戌八月初三日		
持明院天真了性上座		

(相應淨心居士他18名の法号)

〈北面〉

注1：享保十八癸丑年は、1733年。

注2：寛保 三壬戌歳は、1741年。この碑文の刻み方と異なり、細

く小さい。後で陰刻したものか。

(2) 若松寺の一字一石經壇塔

若松寺は、和銅元年（708年）に行基が開基し、後に慈覺大師円仁によって再建されたと伝えられる古刹である。最上三十三観音の第一番札所のなっており、観音堂、金銅聖観音像懸仏、板絵着色神馬図は国の重要文化財に指定されている。

本堂と鐘楼との間に、若松寺一字一石經壇塔が建っている。

位 置 天童市大字山元2205番地の1

建 立 享保十七壬子歳（1732年）

經 碑 全体高178cm、塔身高113cm同幅38cm、笠は四柱屋根で高さ31cm軒最大幅64cm、屋根頂部の幅20cm、軒両端の高さ11cm、中央部の高さ7cm、基礎高さ22.5cm、幅東西60cm、幅南北50cmで、基礎は2段となっている。石材は粗面岩であり、正面を西向きに建ててある。

要岳了玄上座

誰拜書大乘妙典一字一石經壇塔 （蓮華座）

〈西面〉

覺潭妙圓比丘尼

施主天童住

享保十七壬子歳九月四日

〈東面〉

鑄水了性拜書之

三界萬靈有緣無縁六親眷屬平均普利

〈南面〉

拜蓮經書員石世尊諸佛總歡喜 常光院耶曜月妙照清信女

〈北面〉

兩親六道納蓮華見聞衆生僧禮法 真如壽寶大師

悟習種智因肆發□則清樂究 妙雲院淨□□清信士

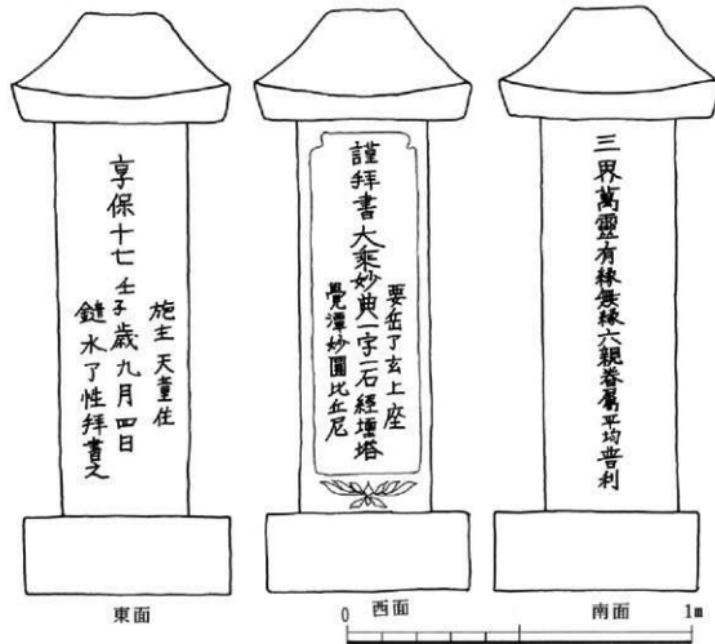
此經維時漸日持者命修造當生切 智山定慧信士

注1：享保十七壬子歳は、（1732年）

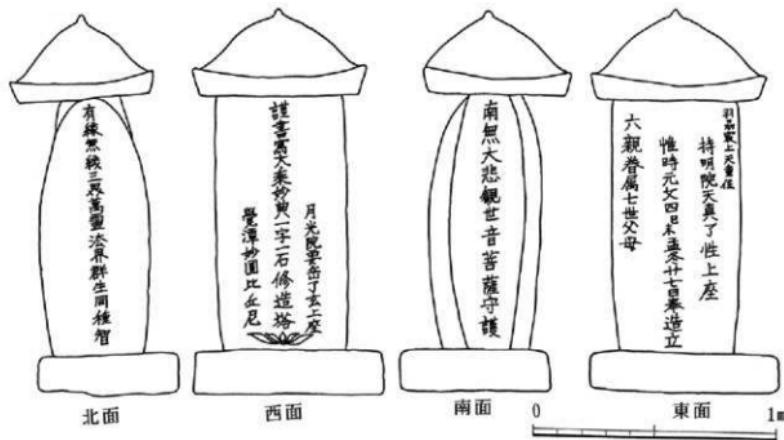
注2：鑄水家は若松寺の信仰と深く結びついており、十羅刹堂の建立や三十三観音堂の再建を行っている。

注3：北面下段の法号は後に陰刻したものか。

第11図 若松寺一字一石經壇塔



第12図 原町一本杉一字一石修造塔



(3) 原町一本杉の一字一石修造塔

天童市街地から山寺立石寺に向かう山寺街道と交差し、貫津をとおって若松寺に向かう街道があった。現在は変形十字路である。この交差点には、一本の杉が植えられているため、原町一本杉と呼ばれている。（乱川一字一石經壇塔の近くにも、杉が植えられていた、と小座間氏は、話している。）この場所は、奈良沢村、下荻野戸村、原町村の村境である。

位 置 天童市大字原町115番地の1

創 立 元文四七己未（1739年）

系 組 石碑 全体高133cm、塔身高106cm同幅55cm、笠は高さ32cm軒最大幅70cm、軒両端の高さ10cm、中央部の高さ6.5cm、基礎高さ17cm、幅77cmを測り、つ以前は、東側に建立されていたが、道路整備工事に伴い、現在地に移動された。移動の際に、おびただしい一字石經が出土したが、そのまま、埋め戻している。移動前の正面は、北に面していた。

月光院要岳了玄上座

謹書寫大乘妙典一字一石修造塔

（蓮華座）

〈西面〉

覺潭妙圓比丘尼

羽州天童住

〈東面〉

持明院天真了性上座

惟時元文四己未孟冬一七日奉造立

六親眷屬七世父母

南無大悲觀世音菩薩守護

〈南面〉

有縁無縁三界萬靈法界群生同圓種智

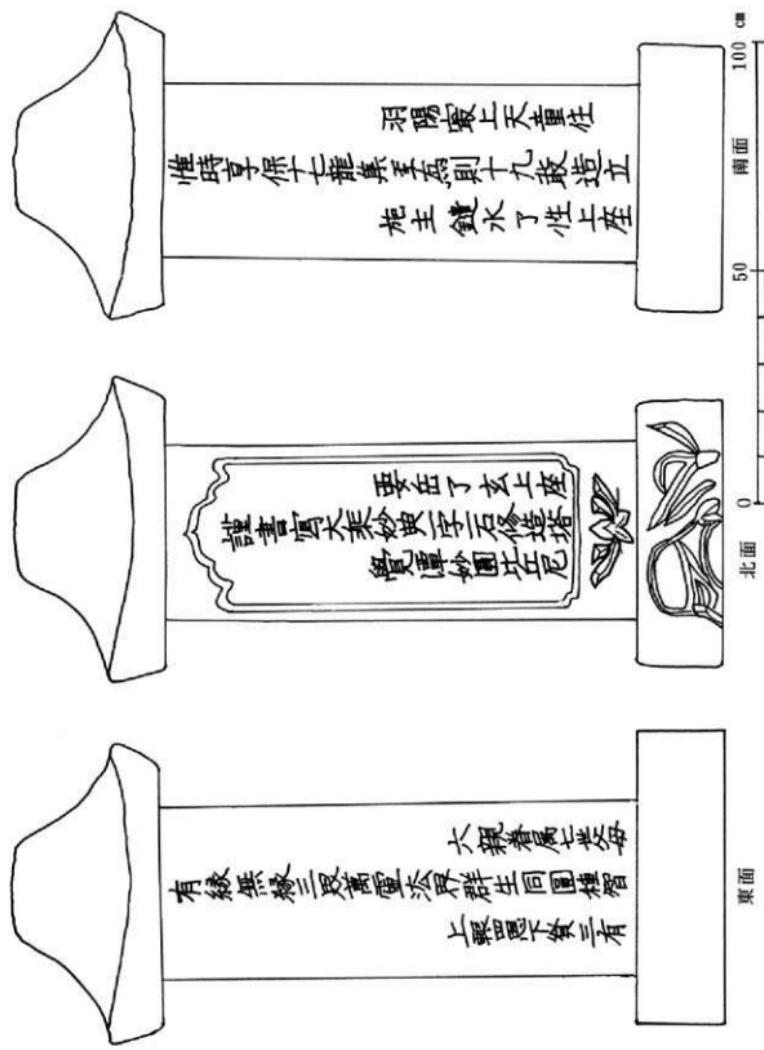
〈北面〉

注1：元文四己未孟冬は、（1739年）。

(4) 山形市宮町慈光寺の一字一石修造塔

慈光寺は、山形市市街地の北部、JR北山形駅前にある。縁起によれば、ここには、斯波兼頼が、延文11年（1356年）、出羽国按察使として入部するまで、土豪西根小但馬の館屋敷があった。至徳元年（1384年—北朝—）に西根氏は、自ら屋敷内に寺院を

第13圖 山形市慈光寺一字一石修造塔



創建し、これを至徳寺と号し、法山品丁品和尚を招請したのが始まりであった。その後、慶長年間に慈光禪寺と改称したといわれる。現在、慈光寺の墓地は、本堂の南側に広がり、そこには、最上氏の家臣鈴木備後守、小泉掃守の墓所がある。鈴木備後守の墓所の東向に舗水家の墓所がある。山門の南に慈光寺一字一石修造塔が建っている。

位 置 山形市宮町1丁目12番21号

建 立 享保十七壬子(1732年)

系 組 碑 全体高152.5cm、塔身高102cm同幅38cm、笠は四柱屋根で、宝珠が欠けている。笠の高さ31.5cm、軒最大幅66cm、軒下幅60cm、軒両端の高さ10.5cm、中央部の高さ7cm、基礎高さ19cm、幅57cm四方である。碑は、正面を北面にして建てられている。

要岳了玄上座

謹書寫大乘妙典一字一石修造塔

〈北面〉

覺潭妙圓比丘尼

六親眷屬七世父母

有縁無縁三界萬靈法界群生同圓種智

〈東面〉

上報四恩下資三有

羽陽最上天童居住

惟時享保十七龍集壬子為則十九節造立

〈南面〉

施主 般水了性上座

書再書如快德全 □玄類□□□□

〈西面〉

(を含む2段4行で下文が陰刻されている。)

注1：享保十七龍集壬子は、(1732年)。

6 考察とまとめ

(1) 一字一石經について

経塚は、仏教經典を主体に、土中に埋納し、その多くは、土を盛って塚にしたり、標識として収納塔（碑）を建立している。経塚の起源については諸説があり、天台宗総本山比叡山延暦寺第3世座主慈覺大師円仁が提倡したといわれている。釈迦が入滅して、56億7000万年後に、弥勒菩薩がこの世に現れ、濟度してくれるまで經典を土中深く埋納しておこう、という考え方である。この考えは、末法思想によるものが始まりである。しかし、その根底には、現世利益的な面も含まれており、時代が経るにしたがって、極楽往生、追善供養、逆修供養など功徳を重視するようになったようである。

一字一石經は、礎石經の分類で、ほかに多字一石經などもある。小さな河原石などに、經文を書写し、土中に埋納する。一字一石經で古いものは、大分県上尾塚で暦応2年（1339年）に「サ（種字）浄土三部經一字一石」背に、「キリーク（種字）一奉読誦法華經三十三部□光明真言万三千 暦応式己卯三月三日一奉書寫法華七部」の銘文が、普光寺参道の八面幢に刻まれているという。経塔で現存するものでは、最も古い例である。

埋納の方法については、まちまちであるが、寺社境内や墓地、宗教的意味のある土地や寺社へ向かう街道の辻などから、よく經石が出土している。その標識として石塔を建てるものもあるが、かならずしも經石が埋納されているとは限らない。単に經供養として建てられる場合もあるようである。これは、鎌倉時代に行われ、江戸時代のものが圧倒的に多く、全国的にかなり広く分布している。県内では、500基以上存在すると考えられ、山形市38基、寒河江市7基、尾花沢市20ヶ所が確認されている。また、米沢市覚範寺廢寺跡や尾花沢市の上林經塚で発掘調査が行われている。

天童市内に見られる一字一石塔は、20基をかぞえる。最も古いものは、元禄元年（1688年）に建立された、今町の一宇一石經塚である。これは、今町寺七世住職湛玄恵寂和尚が、最上川の洪水を防ごうと妙法蓮華經6万9千余字を書写し土中に埋納し、8本の桿を植えたものである。昭和36年の最上川上流倉津川改修工事の際に、多量の墨書一字一石經が出土したが、縁の地に埋め戻した記録が、今町經壇碑に記してある。

市内で、1700年代には、13基の一宇一石塔が建立されている。また、1800年代には6基建立されている。このうち、乱川橋東に、嘉永6年（1854年）に建立された一字一石供養塔の移動の際に、多量の一宇一石經が、出土している。

經碑に関連した寺院の宗派は、天台宗、浄土宗、曹洞宗などである。若松寺は天台宗。常安寺、誓願寺、生蓮庵、成生庵は、浄土宗。常樂寺、清龍寺、今町寺、見性寺、法來寺、法体寺、昌林寺は、曹洞宗の寺院である。写經した經典は、誓願寺の護念經を除けば、ほとんどが妙法蓮華經である。また、乱川一字一石經塚塔、原町一本杉修造塔、寺津丸測觀音の碑に、南無觀世音菩薩の碑文が陰刻されている。

天童市内の一宇一石塔年表

(平成6年7月現在)

年号	西暦	名 称	施主または写經主
享保 10	1725	三宝寺一字一石經壇供養塔	駐 深阿謹洞廣山
16	1731	常安寺一字一石經壇塔	鏡水了性
17	1732	若松寺一字一石經壇塔	鏡水了性
(17)	1732	山形市宮町慈光寺一字一石修造塔	鏡水了性上座 ()
18	1733	常安寺奉誦百部	鏡水與次右衛門
20	1735	寺津不動尊大乘妙典千部法華塔	
元文 3	1738	乱川一字一石經壇塔	鶴主 持明院天真了性上座 駐鏡水與次右衛門
	4	原町一本杉一字一石修造塔	持明院天真了性上座
延享 3	1746	寺法侍 大乘妙典供養塔(6月)	(法体寺種密)
3	1746	上瀬口法華一字一石供養塔(7月)	
3	1746	蘆野戸 一字一石供養塔(8月)	見性寺8世 義單 蘆野戸中
宝曆 3	1753	川原子常楽寺一字一石塔	願主 滝口彦十郎
7	1757	成生庵薬師神社一字一石供養塔	有全亮覺 駐志村中
明和 5	1768	貫津勢至堂一字一石塔	鶴大安慧林 駐昌持8世
寛政年間	1788~	今町經壇	今町寺7世 淳玄恵寂
寛政 7	1795	寺津九間屋 一字一石供養塔	法來寺祖山
文政 12	1829	大通水道寺 一字一石塔	駐松浦吉平
天保 元	1838	蓮華寺護念經碑	淨蓮社良香智阿上人
14	1852	石倉生庵 正觀世音塔	世話人28名(内8名女性)
嘉永 6	1854	乱川義東 一字一石供養塔	
安政 4	1857	乱川新荷神社 大乘妙典供養塔	
文久 2	1862	天童小路和光院金比羅大権現、心經書門品一字一石	

(2) 鎌水與次右衛門について

鎌水家の歴史は、過去3度にわたる火災による延焼で、古文書類は焼失しており、鎌水家以外の資料によって、鎌水與次右衛門についてふれることにする。

慈光寺位牌によれば、鎌水家の先祖は最上義光氏の家臣である。また、上杉勝周の六男であるといわれる。その名を鎌水與治右衛門政詮といい、天童鎌水家の初代であるという。常安寺の墓碑によると、法号を見性院淨翁清心居士といい、寛永18年(1641年)霜月十日である。その妻の法号は、妙法院轉覺妙變大姫といい、寛文十一年(1671年)年二月六日(1641年)没である。同家の家紋は、丸に片喰及び丸に互い鷹の羽で、初代政詮より代々與次右衛門の名を世襲している。

阿部源藏著『天童古事記』によれば、

寛文年間ニ鎌水ノ家屋ハ久野本熊ノ堂南ニシテアル。其頃ハ秋田往還ハ東山ノ麓ヲ面リタル也。今ノ往還ニナリテ久野本ト地替ニテ今ノ老ノ森トナル。鎌水家一手ニテ屋敷ヲ仕立人ニ与フ金銭ヲ附与シテ、屋敷モ与ヘル由也。

と述べてあり、現在の老野森が形成されたのは、鎌水家の力であったという。

鎌水家の墓所は二か所にある。一つは、菩提寺でもある山形市宮町の金華山慈光寺で、もう一つは、天童市久野本の本久山常安寺である。常安寺の墓所には、石燈籠3基が建ててある。うち1基は、高さ133cm、竿の高さ49cm、竿直径20cmで、「元禄十三年 燈籠 施主了玄 十月七日」と陰刻されている(元禄13年は、1700年)。

もう1基は、常安寺歴代住職の墓前左に移されており、規模は同じで、「元禄十三年 施主敬白 燈籠 卅月八日 鎌水了玄」と刻まれている。他に、一字一石經壇塔の前に建立したと考えられる石燈籠の竿が、墓碑の裏にある。この竿は中央部に節を持つもので、現在高57cm、竿直径20cmである。碑文に「享保十七 天童住口 奉建立一字一石口口塔 七月四日 鎌水與治右衛門」と陰刻されている(享保17年は、1732年)。慈光寺の鎌水家墓所にも対で石燈籠がある。向かって右のものには、「延寶八神總 施主天童 石燈籠 閏八月四日 鎌水了玄」とあり、向かって左のものには、「施主天童 奉建立 鎌水與次右衛門」と刻まれている。常安寺のものは、元禄13年(1700年)に、さらに慈光寺のものは、延寶8年(1680年)に建立されたものである。

墓碑を見ると、鎌水家の先祖には、上座、比丘尼、禪定尼といった位号が見られる。慈光寺の墓碑群は、向かって右側に、鎌水氏妻が建立した「鎌水家部類有縁無縁三界萬靈等」があり、北面(左面)に柏樹了庭居士とあり、東面(裏面)には、宝曆十二年十二月と建立年月が刻まれている(宝曆12年は、1762年)。

その左に、見性院淨翁清心居士と妙法院轉覺妙變大姫の墓碑がある。大きさは、全体高149cm、塔身高78cm、同幅27.8cm、基壇は2段で、入母屋型の笠を持つ。笠の高さ23cm、軒上場幅39cm、軒両端高7cm、中央部高5cmである。その左に墓碑があり、右上から法号を列記すると、次のようになっている。

鍼水家関係年表

年号	西暦	事項
寛永 18 年	1641 年	鍼水家祖与治右衛門政詮 見性院淨翁清心居士 没。
寛文 年間	1661~1672 年	久野本青柳家と地替を行い、鍼水家が住民に屋敷を与えるという。(天童古事記)
寛文 11	1671	政詮妻妙法院轉譽妙變大姉 没。
延寶 8	1680	大仙院淨岩榮心居士 没。(三詩一石経塔裏の碑文に同名のものがある。) 了玄 慈光寺に石燈籠を建立。
貞享 3	1686	醫比院淨譽妙禪大姉 没。
元禄 3	1690	了玄 若松寺に十羅刹堂建立。
7	1694	顯正院覺潭妙圓比丘尼 没。
13	1700	了玄 常安寺墓地に石燈籠2基建立。
16	1703	月光院要岳了玄上座 没。
享保 16	1731	了性 常安寺に一字一石経壇塔建立。
17	1732	了性 7月に常安寺に一字一石経壇塔に石燈籠建立。 了性 9月に若松寺に一字一石経壇塔建立。
		了性 山形市宮町慈光寺に一字一石修造塔建立。
18	1733	了性 常安寺に奉誦大乘妙典百部の塔を建立。
20	1735	了性 慈光寺墓地に大仙院淨岩榮心居士ほかの名を陰刻した墓碑を建立。
元文 3	1738	了性 亂川に一字一石経壇塔を建立。
4	1739	了性 原町一本杉に一字一石修造塔建立。
寛保 2	1742	持明院天真了性上座 没
享保5(眞元)	1748	與治右衛門治喜 若松寺三十三觀音堂を再建。
宝曆 12	1762	12月慈光寺墓地に鍼水家部類有縁無縁三界萬靈塔を建立 (右面に鍼水氏妻、左面に柏樹了庭居士)
文政 2	1819	老野森村宗門改入別帳に、名子与治右衛門五十一歳とある
12	1829	天童宿# 老野森村久野本村印帳に「い志や 与次右衛門」とある。

大仙院淨岩榮心居士、醫比院淨譽妙禪大姑、月光院要岳了玄上座、顯正院覺潭妙圓比丘尼の4名。下には、持明院天眞了性上座、法清院妙練日成大姑（慈光寺の過去帳によれば、「蓮華日成」）、柏樹了庭居士、真如壽賣大姑の4名。合計8名の墓碑であり、左側面に、一字一石經や、石燈籠に関する文面が刻まれている。全文は判読不明であるが、内容は、次のようにになっている。

相當了玄上座三十三回忌之辰奉書寫大乘妙典

一字一石修菩提了性永石燈靈前□□塔

金華山頸其奉等了性 回不可死義光

時□回向主ハ了玄上座□□□□□果右也

この墓碑の建立年月は、享保二十乙卯天孟冬（1735年）で、大きさは、全体高15.1cm、塔身高7.8cm、同幅27.4cm、笠の高さ2.7cm、軒最大幅45.5cm、笠頂部の幅22.5cm、基壇は、2段である。

大仙院淨岩榮心居士は、延寶八貞申穂 八月四日（1680年）没で、醫比院淨譽妙禪大姑は、貞享三年九月十日（1686年）没である。

次に、一字一石塔に関わりのある月光院要岳了玄上座は、元禄十六歳 ま十月十日（1703年）没、顯正院覺潭妙圓比丘尼は、元禄七年十二月二十七日（1694年）の没である。了玄は、鏡水與治右衛門了玄と名乗り、寺社等に対して寄進を行っている。その一つは、若松寺の十羅刹堂の建立である。若松寺の別当來院文書には、次のような記録がある。

一札之事

一、拙者意願御座候 て 此度十羅刹堂

建立仕度旨福性院頼入候 て

申上候へば可任其意旨被仰下候

同前建立ハ仕候以後御堂之

何様ニモ少も構申間敷候為其

一札如件

天童

鏡水与治右エ門

元禄三年午九月

来院様

元禄年中

天童老野森鏡水与治右衛門拾羅刹堂

建立ニ付一札取置者也

（注：元禄三年午は、1691年）

この文書は、来吽院が鑓水与治右衛門に対して、一切関係しないとの念書を取ったものである。十羅刹堂の規模は、正徳6年（1716年）の「若松觀音別當来吽院山内覺」によると、堅三間三尺横四間檀方建立とある。

正徳年間（1711年~1715年）から享保年間（1716年~1735年）にかけて、羽黒山の石段構築が行なわれた際に、長い石段を寄進した、といわれる。

若松寺の絵馬堂の中に、延享5年（1748年）に三十三觀音堂を再建した棟札があり、願主鑓水與治右衛門治喜とある。棟札の文面は次のとおりである。

諸仏救世者 住於大神通 延享五 虞 年 執事如法堂憲賢 大工管 清兵衛
同善助

凡奉再建御堂當國札所觀世音三十四幅安置現當安樂祈歎
爲悅衆生故 現無量神力 四月二十有七日 棟主老鑓水與治右衛門治喜 棟
三良兵衛

この棟札が三十三觀音堂再建の証拠となるが、詳細についての資料はない。三十三觀音堂の規模は、三間五尺四方で、建立は、檀方とある。

文政2年（1819年）の宗門人別改帳によると、「名子与治右衛門 五十一歳」とあり、田畠名寄帳には、「壱石四斗三合 本前与治右衛門持地 田畠合壱町九反四畝二十三歩 外新畠二反余」とみえ、「与惣右衛門 理兵工耕作」と記してある。当時から地主層で、耕作は、小作人にまかせていたと、考えられる。

また、文政12年（1829年）2月の絵図面、天童宿並老野森村久野本村印帳に、「い志や 与次右衛門」とみえることから、後年、医師に携わったと、考えられる。

(3) 鐘水與次右衛門了性と5つの一字一石塔

鐘水与次（治）右衛門の法号は、持明院天真了性上座という。妻の法号は、法清院妙練日成（慈光寺位牌—蓮華日成）大姉という。

了性が建立した一字一石塔は、乱川の經壇塔を合わせると、5基である。

一字一石塔の建立は、享保16年（1731年）の常安寺に始まり、翌17年（1732年）には若松寺および慈光寺に、さらに、元文三年（1738年）には乱川に、そして、元文四年（1739年）には、原町一本杉にと、9年間で5基の一字一石塔を建立している。

5基の經塔を見れば、どれも両親の要岳了玄上座と覺潭妙圓比丘尼の追善供養のために建立したものである。このことは、若松寺の「兩親六道納蓮華」等の下文から、判断できる。

なお、これら5基の一字一石經塔が建立された寺院、場所については、次のことが考えられる。すなわち、慈光寺は菩提寺であり墓所。常安寺は墓所。若松寺は、信仰の対象の寺。そして、乱川と原町はそれぞれ、若松寺に続く街道の辻に当たり、鐘水家がかかわった地域の、いずれも村境であり、その分岐点に一字一石塔が建てられている。（若松寺の柏倉師に伺ったところ「四方固め」の意味でも建立することが考えられる、とのことである。）

出土した一石經は、乱川の經壇塔に、「書寫主持明院天真了性上座」とあることから、了性自ら、經文を墨で書写して埋納したことが考えられる。

了性は、慈光寺の位牌と、後年に刻まれたと思われる細い字で、常安寺の百部讀誦塔に、「寛保二 玉（1742年）八月初三日 持明院天真了性上座」とあることから、原町一本杉の修造塔建立の3年後（1742年）に没した、と考えられる。



調査区



図版2 亂川一字一石經壇塔



移動作業



図版3 亂川一字一石經壇塔発掘状況



図版 3 亂川一字一石經壇塔発掘状況

左上 右上は西側断面

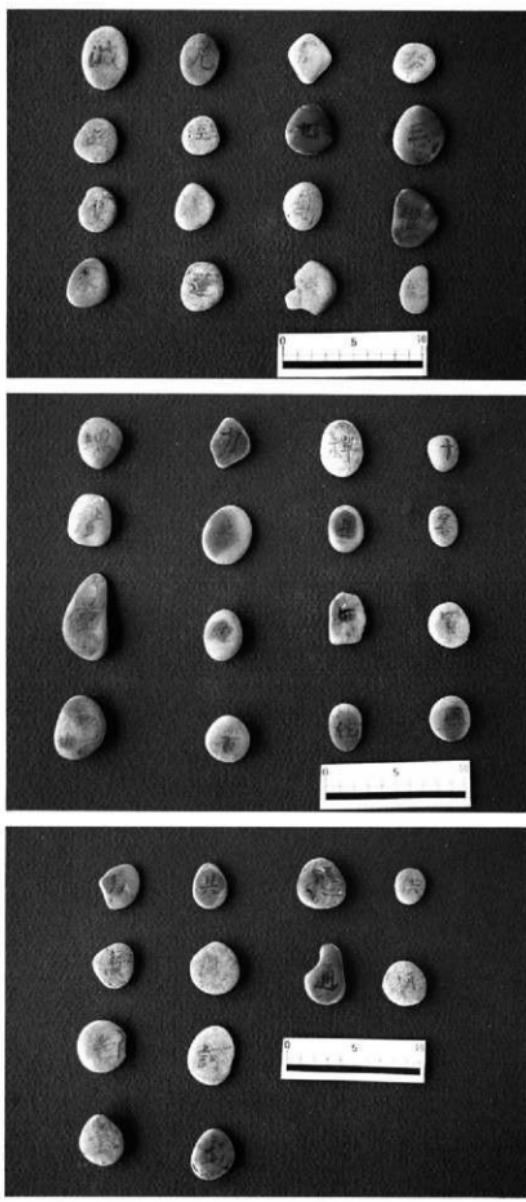
右下は南側断面





図版4 出土絆石と移動理納状況





図版5 出土した一字一石經石



図版 6 常安寺一字一石經壇塔



図版 7 若松寺一字一石經壇塔



図版 8 原町一本杉一字一石修造塔



図版 9 山形市慈光寺一字一石修造塔



図版10 若松寺棟札



図版11 移動後の乱川一字一石經塚塔

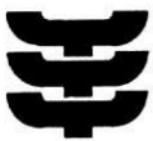
天童市埋蔵文化財調査報告書 第9集

乱川一字一石經壇塔遺跡
発掘調査報告書

平成6年 9月21日 印刷
平成6年 9月27日 発行

天童市教育委員会

印刷 豊田太印刷所



文化財愛護のシンボルマーク